

種子島医療センター小児科 院内報 第1報

2020年(令和2年)5月25日 小児科 岩元二郎

〈新型コロナウイルス感染症について〉

昨年12月中国から始まった新型コロナウイルス感染症が全世界に広まり、今年の3月10日WHOはパンデミックを宣言しました。全世界的にみて、この感染症の特徴は、感染した人の8割は軽症か無症状、2割が重症化しやすいということです。その重症化して死亡しやすい年代は高齢者が多いと言われています。15歳未満の小児の感染者は少なく、感染しても死亡に至るケースは圧倒的に少ないと言われています。子どもが感染する場合は、大人からの感染が多いようです。感染予防対策は、濃厚接触を防ぐ(3密の回避)手洗い&うがいの徹底、マスクの励行といった基本的なことを確実に行っていくことで、コロナに限らず他の感染症も防げるにつながります。

〈院内の対策について〉

現在種子島医療センターでは、新型コロナ感染症の段階を下記のように設定しています。

- | | |
|-------|-------------------------------------|
| レベル1: | 国内で発生した場合 |
| レベル2: | 鹿児島県で陽性者が確認された場合 |
| レベル3: | 種子島で陽性者が確認された場合(感染流行の初期段階) |
| レベル4: | 種子島で肺炎患者が多発や死亡が確認された場合(感染流行の拡大・蔓延期) |

2020年5月末現在、鹿児島県ではこれまで10名の患者発生がありますが、種子島での患者発生はなくレベル2の段階です。発熱や咳鼻水等がある場合は必ず保健所を通して来院してもらい、医師がコロナを疑わしいと判断した患者は「帰国者接触者外来」と「発熱外来」でPCR検査を行っています。PCR検査をする際は、必ず医師看護師はマスクとキャップ、フェイスシールドと个人防护具を着て鼻腔から検体を採取しています。

検査に関しては、インフルエンザのような迅速診断キットがまだありません。東京や大阪のように流行が蔓延してレベル4の状況になった場合、感染しているかどうか心配なのですぐに検査をしてほしいというような要望があっても現状ではすぐにはできません。医師が疑わしい時にだけPCR検査をすることになるかと思います。

PCR検査の他に抗体検査が保険適応になっていますが、この抗体検査も医師が必要と認めたときのみ可能となります。今後、数か月後には唾液によるPCR検査、抗原検査(インフルエンザのような迅速診断キット)もできるようになることが予想されます。またワクチンも期待されていますが、優先順位がありますので、一般的に幅広くできるようになるには数年後が予想されています。

〈当院での小児患者の対応について〉

現在、レベル2の段階での当院小児科では、15歳未満の小児ではコロナ感染症を疑うケースはなくPCR検査を行っていません。種子島で患者が発生した場合のレベル3になると、保健所との連携で濃厚接触者も含めて小児でもPCR検査を実施する必要があります。

コロナの小児患者が発生した場合の対応です。コロナに感染しても小児の場合は軽症患者が多いことが予想されます。子どもの軽症患者さんは原則として自宅療養か行政が用意した施設を利用することになります。また入院する場合は、保護者の同室つきそいを原則としています。コロナ感染に関しては、「軽症」、「中等症」、「重症」、「重篤」という4つの段階に分けます。

- 「軽症」 自宅療養か行政が準備した施設に一時入所
- 「中等症」 酸素が必要な場合で、入院が原則ですが、感染症指定病院である当院での入院の可能性があります。入院は原則として保護者の付き添いが必要です。
- 「重症」&「重篤」 人工呼吸器が必要な場合が「重症」で、体外式膜型人工肺（ECMO/エクモ）が必要な場合が「重篤」となります。当院では入院はできず、鹿児島市立病院か鹿児島大学病院への入院となります。

入院するか自宅療法にするか、どこの病院に入院するかは、病院の医師の判断ではなく、新型コロナウイルス感染症は指定感染症ということで、法律により行政（知事/保健所）の判断が必須となりますので、他の病気の対応のように病院や医師の判断だけで対応するものではないことをご承知おき下さい。

4月7日に全国に発令された緊急事態宣言が、5月25日には北海道と東京・神奈川・千葉・埼玉の首都圏が解除され、全国の解除宣言がなされました。第1波は終息傾向にありますが、次の第2波、3波に備える必要があります。コロナがどのような病態を引き起こすかも徐々に明らかになってきました。備えあれば憂いなし、正しい知識を身に付けて、これまでの感染対策を継続していきましょう。コロナの感染対策はすべての感染症対策につながります。

〈日本小児科学会による小児の新型コロナウイルス感染症に関する医学的知見の現状〉

- 新型コロナウイルスの患者の中で小児が占める割合が少なく、その殆どは家族内感染である
- 現時点では、学校や保育所でのクラスターはないか、あるとしても極めて稀
- 小児では成人と比べて軽症で、死亡例もほとんどない
- ほとんどの小児の新型コロナウイルス症例は経過観察または対症療法で十分である
- 学校閉鎖が心身を脅かしており、小児に関してはコロナ関連健康被害の方が問題